

カムチャツカにおけるオオハクチョウ の繁殖・渡り・越冬

E. G. Lobkov

資料は1971～1979年にクロノツキー自然保護区とカムチャツカの他地域で集められた。

オオハクチョウは、岸に草本類が多く、浅瀬と水生植物の多い大きな湖で繁殖する。海岸地帯や標高600 m以下の山地にも生息するが、非常に少ない。繁殖が確認されているのはウゾン山カルデラ、チハヤ川、クロノツコエ湖周辺に限られている。

住民の話によると、ウゾン山カルデラでは15～20年前に毎年3～4つがいが繁殖していた。現在ここでは1～2つがいが繁殖し、それも毎年ではない。1972年に見つかった巣はカルデラのツェントラリノエ湖北岸にあったが、7月にヒグマにこわされた。1973年にはウゾンでは繁殖しなかった。1974年には1つがいがツェントラリノエ湖内に営巣し産卵したが、多分旅行者、とくにヘリコプターが断らず来たため巣を放棄した。1975年には巣は見つからなかったが、7月末に綿羽の幼鳥が見られ、9月15日には湖に幼鳥のいる家族群がいた。1976年にはウゾンには2つがいがおり、6月8～12日にそのうち1つがいが営巣したが、その結果は不明である。1977年に6月8日に営巣し、6月18日には完成していて、8月中頃には幼鳥が見られた。1978年には夏中ウゾンには2つがいがいたが、繁殖しなかった。

チハヤ川でオオハクチョウの繁殖は1975年に記録された。巣は7月に川下流部にある二つの大きな湖の一つで見つかった。8月21日にここで幼鳥群を観察した。最近ではこの地域では見られない。

クロノツコエ湖周辺では1975、1977年に幼鳥群が一群づつ見られた。一つは湖北西岸のカムチャダロフ湾で、もう一つは南岸のウナナ川とウゾン川近くで見られた。ここでは何回か成鳥が見られた。

このほか1974年にはボリシャカ・チャジマ川下流の大きな湖の一つで繁殖したようであった。6月末と7月にここで何回かオオハクチョウを観察しているが、巣は見つかっていない。

1976年6月にやっとセミヤチン湖北部の湖の一つでつがいを観察し、8月に潟で幼鳥群を見つけた。ここには夏中オオハクチョウがいるが、以前にも最近でも巣も幼鳥も観察したことはない。

Markov (1965) はマラヤ・チャジマ川下流で4～8つがいのオオハクチョウの繁殖を報告している。しかしここで繁殖に適した場所を見つけることはできなかった。

クロノツキー自然保護区では現在5～8つがいのオオハクチョウが繁殖していると思われる。自然保護区に隣接する地域の繁殖地としてはジュバノワ川流域がある。

ウゾンで1巣だけを調べることができた(1974年)。巣は湖の水生植物の多い(水深60～70cm)の浅瀬に造られていた。巣材はコケと水生植物である。直径は基部で1,300 mm, 上部で700 mm, 産座の径は290 mmである。水面からの巣の高さは650 mm。卵の一つは118.1 × 77.3 mmであった。

家族群の観察例としては、1970年7月25日にウゾンで成鳥2, 小さな幼鳥5, 1975年8月21日にチハヤ川で成鳥2, 成長した幼鳥4, 1975年9月15日にウゾンで成鳥と幼鳥が一緒にいたが、幼鳥の大きさ

はほぼ成鳥大であった。

セミヤチン渦地域、クロノツカヤ川下流、ウゾンでは夏に非繁殖鳥が何回か見られた。これらは単独、つがい、まれに4～6羽から18羽の群でもいた(1969年6月26日、クロノツキー自然保護区自然記録)。

1972年7月24日にウゾンで成鳥のつがいが換羽中で、休息・採餌していた場所には多量の羽毛が落ちていた。1974年7月12日にポリシャカ・チャジマ川下流で換羽中のつがいを見つけた。15mまで近づくことができたが、その後隠れていたオオハクチョウは飛び立ち、少し羽毛が落ちた。両つがいとも非繁殖鳥であった。

毎年渡り時期に、春は3月末から6月、秋は9～11月にセミヤチン渦でオオハクチョウを数えた。調査は可能であればモーター付きボードで3日に1回水域全体をまわって、渦が氷でおおわれているときには岸沿いに歩いて行なった。このほか1974～1976年にジュパノヴォ村の「パンヤトク岬」観察点で334時間の観察をしたが、主に早朝(夜明けから4～6時間)、ときどき夕方で、数日は明るい間1日中である。1日に3回数えた。航空機を用いての調査の際にも数えた。

春の渡り：春の渡りは3月下旬に始まる(早い例は1975年3月21日、遅い例は1973年3月30日、6年間の平均で3月26日)。主な渡りルートは岸沿いの海上と陸上である。少なくとも一部は直接クロノツキー半島を(オリガ湾からチャジマ川へ)通過し、一部は海岸沿いに半島を迂回する。少数のオオハクチョウは山地(ウゾン山カルデラ、標高600m、クロノツコエ湖)を飛ぶようであり、日中飛ぶ姿は観察されていないが、まれに湖で群が見られる。ここへは海岸から川沿いに飛来するのであろう。オオハクチョウはよく2～8羽の群で、まれに10～15羽、ごくまれに20～30羽の群で、多くは夜間、明るいときでは朝と夕方に渡る。群はくさび型、梯型、縦型である。1972年には4月9～16日、1973年は4月1～27日、1974年は4月8～16日とその後4月下旬(2回のピーク)によく渡り、1975、1976年には2回の渡りピークがあり、最初は3月末と4月前半で2回目は4月末であった。日中は淡水域に集まり、海上にはいない。セミヤチン渦ではもっとも多く集まる。大きな川(ジュパノワ、カルリスカヤ、ベレゾフスカセ、セミヤチキ、シユムナヤ、クロノツカヤ、マラセ・チャジマ)沿いでも見られる。

セミヤチン渦にオオハクチョウが集まるピークは1971年は4月23日(273羽)、1972年は4月6日(214羽)、1973年は4月16日(224羽)1974年は4月5日(249羽)と4月20日(271羽)、1975年は4月1日(189羽)と4月17日(185羽)、1978年は3月末(300羽以下)と4月6日(263羽)であった。ウゾン山カルデラで1968～1969年に80羽近くがいたとされているが(クロノツキー自然保護区自然記録)、私が見たのは15～30羽であった。川沿いには10～12羽の群がいた。

休息地からは普通5月上旬か中頃にいなくなるが、まれではあるが6月中頃まで少数が残っており、北へ向い続けるが、その一部はセミヤチン渦に残る。5月にも短い移動が活発で、渡りがいつ終るのかははっきりしない。

秋の渡り：渡りに先だって短い移動が9月中頃か下旬に始まる。日中の渡りは9月末か10月だけに見られる(早い例は1975年9月27日、遅い例は1972年10月13日、4年間の平均で10月7日)。渡りが活発になるのは普通10月下旬から11月末までである。1975年多くの渡りがすべて10月中頃は見られた。オオハクチョウは1日中渡るが、夜間が多く、日中には朝と夕方に多い。18～22羽、しばしば6～10羽の群で見られる。春と同様に大部分は海岸沿い(海上と陸上)を渡り、少数が山地を飛ぶ。大部分はセミヤチン渦の休息場に集まる。ここでの数のピークは11月で、1972年は11月1日(305羽)、1973年は11

月15日(300羽)であった。ウズン山カルデラで1969年11月10日にヘリコプターから50羽、10月20日に10羽が数えられたが(クロノツキー自然保護区自然記録)、私は最近ここで25~30羽を記録した。15羽以下の群が大きな川沿いで見られる。クロツカヤ川河口で1969年11月10日にヘリコプターから約100羽、11月20日に50羽が数えられた。海上にはいなかった。

10月と11月に渡り個体の中によく幼鳥群が見られる。成鳥つがいと幼鳥3~8羽が群となり、互いに間隔をおいて採餌する。幼鳥のいないオオハクチョウは群になっている。例えば1975年10月16日にセミヤチンゴで229羽が教えられ、そのうち85羽の幼鳥群が識別できた。幼鳥群としてまとまっていた遅い例は1975年の11月25日(チハセ川とコマロワ川)であった。

普通11月末に短い移動が始まり12月まで続く。しかし15羽以下のオオハクチョウの群が12月上旬いっぱい南方向へ渡る。明らかにこの頃秋の渡りが終るが、越冬で残る個体が遅くまで移動している。

越冬しているオオハクチョウの調査は、岸を歩いてと定点から、また高度40~80m、ときには250m、速度90~100Km/hでヘリコプターから行なった。

越冬数はクロノツキー自然保護区内(マラヤ・チャジマ川からセミヤチンゴまで)で200~260羽、セミヤチンゴ以南のジュパノワ川までで20~40羽である。1960~1961年にMarkov(1963)は自然保護区南部でヘリコプターから490羽を教えた。このように、この12~18年間で越冬地での数はほぼ半分に減少した。

大部分はセミヤチンゴ周辺で越冬する(自然保護区で越冬する50.3~79.7%)。この地域の越冬地は、ノヴァヤ川、スタラセ・セミヤチキ川、セミヤチンゴ北部の温水の流れる川(ボルモチナ川とチョプリ川合流部)、沿岸の小さな湖沼である。その地域でオオハクチョウは冬中移動しており、5~12羽の群が川沿いで見られ、集中場所(セミヤチンゴ北部)での数は変動し、1977年3月の4回の調査結果では7~41羽であった。

オオハクチョウの越冬はクロノツカヤ川、その源流部、中洲でも知られており、毎年40~98羽がおり、つがいや小群がここからリストヴェンニチナヤ川の開けた場所に飛んで行く。30羽以下がウナナ川中流部に集まる。

チハヤ川、主にその中流部で45羽以下が越冬する。ここからつがいや小群がムツナヤ川、ジュムナヤ川、コマロワ川に飛んでゆくが、そこでは越冬しない。

ウズン山カルデラ(標高600m)の湖では10~35羽が越冬するが、高山の条件では温水のある不凍部だけにおいて、ウズンと他の越冬地との間の移動で数は冬中変化する。セミヤチンゴからウズン山に向う群も観察された(1972年2月26日)。

ジュパノワ川中流部ではいつも越冬する(15~20羽、多分それ以上)。群がベレゾヴァヤ川沿いやカクリムスカヤ川沿いで見られる。オオハクチョウが移動する範囲にこれらの水域を含む。

このように、冬にカムチャツカ南東部でオオハクチョウが見られる所は全て互いに連絡しており、一つの越冬地のようになっている。オオハクチョウの分布全体から、この地域には毎年飛来し、多くの個体が冬中いる主要な場所6カ所があることが明らかである。

オオハクチョウが越冬する水域は、水温、流れの速さ、川幅の広さ、水深、岸の性質、積雪や氷の状況に特徴がある。冬に川の水量は少なく、流速は比較的小さく、下流部の「低温」の川の大部分は凍結せず、少数のガンカモ類、とくにオオハクチョウが飛来する。オオハクチョウの越冬地として重要な

は、温水の流れる支流があることである。大きな川で温水が流入する所では開水面があり、よい水域で、例えばチョブラヤ川（セミヤチン瀉周辺）やウゾン山カルデラの温水湖は冬中凍結しない。きびしい冬には温水の流入する水域は、ガンカモ類の越冬にとって数少ない好適な所である。

年によるオオハクチョウの数の大きな変化は、まずそれぞれの地区の気候や氷の状況、また局所的な移動による。冬がもっともきびしかったのは1978/79年で、1月にはセミヤチン瀉でもオオハクチョウがいなかった。

冬のオオハクチョウの死亡は普通多くはないが、ときどき大量に死亡することがある。例えば1970/71年の冬がそうで、セミヤチン瀉地域で川沿いに約30羽の死体があった。最近ときどきではあるが2～4羽の死体を記録した。食物で重要なのはリュウノヒゲモである。

繁殖ディスプレイは2月末から3月初めに見られた。この時期、とくに3月前半に春の渡りに先だって活発な移動が見られる。（訳：藤巻 裕蔵）

文 献

〔ソ連におけるハクチョウ類の生態と渡り，85～87（1987）〕